

### おやまこう 大山講と大山灯籠 近世から続くともしび

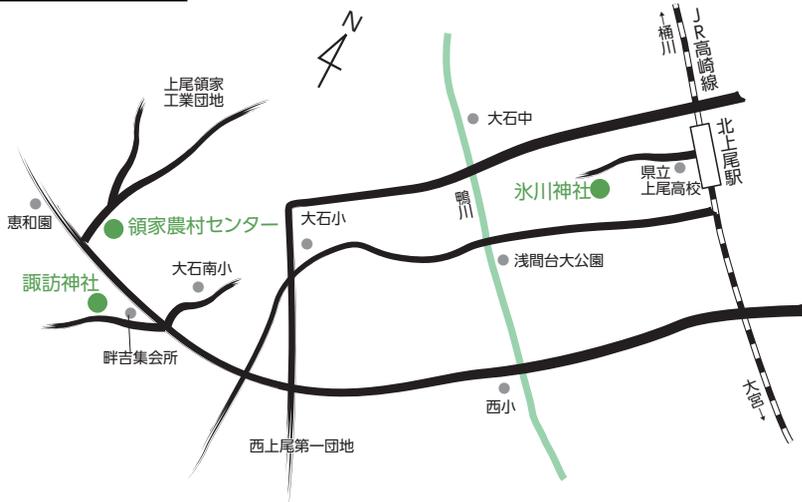


写真1 氷川神社(浅間台)の木製の大山灯籠



写真2 畔吉の諏訪神社の大山石灯籠(左)・領家農村センターの大山石灯籠(右)

近世中期になると、上尾市域でも盛んに「講」が組織されるようになる。「講」とは、ある目的を持った集団や結社などをいい、代表的な講に神社の信仰、または神社参詣するための組織がある。これは、性格や機能から大きく二つに分類される。一つ目は遠隔地の霊験あらたかな神社を信仰する集まりの講である。もう一つは、社寺参詣のために組織され、参詣が終わると解散される臨時的なもので、上尾市や周辺地域では、伊勢神宮を信仰する信者組織または伊勢参詣のための組織である「伊勢講」や、富士山を信仰する「富士講」、羽黒山・月山・湯殿山の出羽三山を巡る「出羽三山講」などがこれに当たる。

後者が村を超えて結成されるのに対して、前者は村単位で加入し組織されるものであり、年に1回、代表者を決めて参詣する「代参」が行われることから「代参講」ともいわれ、明治から大正にかけて最盛期を迎える。県内では、群馬県高崎市の榛名神社を信仰する「榛名講」や、東京都青梅市の御嶽神社を信仰する「御嶽講」、埼玉県秩父市の三峰神社を信仰する「三峰講」などが多く行われていた。

中でも、榛名講と並んで市域のほとんどの地区に存在していたのが、神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社を信仰する「大山講」である。大山阿夫利神社は、農業や出世の神様として信仰されてきた。石尊講とも呼ばれ、夏の山開きである7月27日から8月17日に代参を行っていた。この時、各地区で組み立て式の灯籠を立てる行事があり、これは大山灯籠や石尊灯籠と呼ばれている。木製の灯籠で、灯籠の周りに4本の竹を立て、しめ縄を張るのが一般的である。他にも鉄製の灯籠などもある。立てている期間中は毎晩明かりが灯され、現在でも19の地区で、それぞれの形を守りながら受け継がれている(写真1)。

また上尾の西部に位置する畔吉の諏訪神社と、領家農村センターには、石で作られた大山灯籠が常設されている。それぞれの正面には「大山石尊大権現」「阿夫利神社」と文字が彫られ、石でできたものは市域では珍しく、市の文化財に指定されている(写真2)。畔吉の諏訪神社の大山石灯籠の背面には「元治元年子歳六月吉日(1864年)と紀年銘があり、幕末の夏のひと時に灯された、灯籠の明かりをしのがせている。

(上尾市生涯学習課)

### コラム column

### 相互救済講だった頼母子講

数ある講の中でも金融のための組合で、互助的な要素がある「頼母子講」の起源は古く、内容は相互救済的な金融制度であったという。

近世当初、都市部の小規模な商工業者の間で資金調達のために行われていたものが、経済活動の活発化に伴い、農村部でも盛んに行われるようになった。

発起人が親となり、一口いくらという一定の金額(掛け金)を設定する。講員が年に1回または2回集まり、掛け金を出し合っ

たの時に集まったお金を、くじ引きで当たった人が借用するというものである。各講員とも、借用できるのは1回で、全員がこの権利を行使し終えると講は終了となる。

一定の金額を拠出する必要があるが、まとまった金額が手に入るため、大きな仕事ができたといい。例えば、代替わりや分家のための準備金としての「相続講」「出世講」、屋根の葺き替えの「屋根講」や畳の取り換えのための「畳講」など、あり方はさまざまであった。

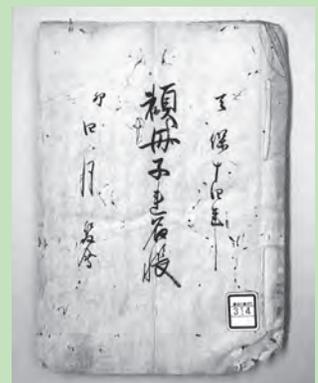


写真3 天保14(1843)年の頼母子講連名帳(南村須田家文書)